

研究ノート

## 戦後日本の知識人とマスメディア

——高坂正堯と NHK の場合——

Intellectuals and mass media in postwar Japan

森田 吉彦\*

MORITA Yoshihiko

In this paper, I considered the relationship between intellectuals and the mass media. By researching the NHK Archives, I examined how KOSAKA Masataka, one of the representative intellectuals of postwar Japan and establisher of study of international politics in Japan, was involved in the mass media. Kosaka has appeared on various NHK programs over 30 years. Some shows focused on his own personality and deviated from his academic expertise. However, when the age of "new television politics" came in the 1990s, Kosaka came on many programs that made use of his specialty. In those, he provided academic perspectives on post-Cold War international politics and sharply criticized Japanese politics and diplomacy.

キーワード：高坂正堯（KOSAKA Masataka）、戦後日本（postwar Japan）、NHK アーカイブス（the NHK Archives）、国際政治学（International Politics）

テレビは 20 世紀後半のマスメディアの花形であり、政治や社会にも大きな影響を及ぼしたように思われる。程度や内容の問題はさておき、テレビが影響力を持ったマスメディアであったこと自体に、異論をさしはさむ論者はあるまい。しかし、テレビ番組を対象とする研究に対しては、番組の権利関係などの固有の障壁があり、参照すること自体に制約を受けて、実態がなかなか明らかになっていないのが現状である。

本稿では、そうした状況からすれば例外的に研究者に門戸を開いている NHK アーカイブスを用いて、知識人とかかわりという切り口から、マスメディアを捉えていく、その一助となることを目指す。もちろん、NHK アーカイブスといえども、後述のように、実際の利用にあたってはさまざまな制約がある。しかし、何もできない、ゼロの状態よりもはるかに価値がある。特に対象とするのは、戦後日本の代表的知識人の 1 人であり、「現実主義」の論客として知られ、京都大学法学部で政治学、特に国際政治学を教えた高坂正堯（1934～96 年）である。

ここで高坂を取り上げるのは、彼が(1) 30 年以上の長きにわたって継続的に政治論争の一端を担い続けたため

に、1 人で時代による変化を捉えやすいこと、また、(2) 特に大学の教授がテレビで活動する、その先駆けとなった人物であったことからである。繰り返しになるが、こうした研究を行うのに、テレビの史料は今日なお未整備な状況にあり、先行する成果は日本ではほとんどないのが実情である<sup>1)</sup>。以下、1. で高坂の出演番組を概観したうえで、具体的に 2. と 3. で政治がテレビとの関係を模索し変容していく 1970～90 年前後の、4. で「新しいテレビ政治」の時代を迎える 1990 年代の<sup>2)</sup>、いくつかの番組について見ていくことにしたい。

### 1. NHK アーカイブスの高坂正堯

最初に、インターネット上のサイトである NHK アーカイブスの「番組表ヒストリー」から、高坂が出演者に含まれるものを確認しよう<sup>3)</sup>。検索すると、全部で 234 件ヒットする。そのうち、再放送の類や衛星放送、ラジオを除き、地上波の初回放送に絞ると、150 件ほどが残る。この出演数は、例えば作家の司馬遼太郎などと比べればはるかに少ないものの、毎回出演のレギュラー番組

\* 大阪観光大学観光学部／政治学

を持っていたわけでもない知識人としては、多いと言っても良いだろう。そのうち3分の2ほどは、出席者の1人としてキャスティングされたシンポジウム、座談会、討論会などであり、残る3分の1では、講演や対談、自身がキャスターを務めたドキュメンタリーなど、高坂はメインキャストとして出演している。ただし、すべての番組がアーカイブスで収集・保存されているわけではなく、また、アーカイブスのすべての番組が閲覧できるわけでもない<sup>4)</sup>。特に、NHKが組織的な保存を始める1981年より以前の所蔵件数は限られている。

高坂がNHKアーカイブスの史料に初めて登場するのは、1964年5月6日午後8:00~8:59に教育テレビで放送された「憲法問題特集(3)『国際情勢と第九条』」の討論者の1人として、である。それ以降、1965年8月29日の午後10:00~11:00に総合テレビで放送された、後述の吉田茂元首相へのインタビューをはじめとして、たびたびテレビの画面に登場するようになった。

とりわけ、1970年代後半以降、ややテレビタレント風の役どころにつけながら、高坂を「看板」にした番組が制作されていくことが目を引く。すなわち、(1)例えば「わたしの挑戦『高坂正堯・阪神監督になる』」(1977年10月9日午後10:05~10:35、総合テレビ)、「しゃべくりバラエティー『日本一』『“阪神対巨人”大舌戦』」(1983年4月23日午後0:20~0:44、総合テレビ)のように、“熱狂的阪神タイガースファン”という彼のキャラクターがとりあげられる一方、(2)「日曜美術館」(1978年10月8日午前11:00~12:00、教育テレビ)、「歴史への招待」(1979年4月26日午後10:00~10:29、総合テレビ)といった、政治学者としての本来の専門性から少し外れた教養番組への出演が目立つようになる。

他方、もちろん専門にかかわるような内容でも、(3)「高坂正堯の宰相・吉田茂論」(1978年9月21日午後10:00~10:29、総合テレビ)や「外相・重光葵~高坂正堯が語る日本の外交~」(1995年8月31日午後8:00~8:45、教育テレビ)のような高坂の名前を冠した番組ができ、(4)さらにはシリーズ化された「新・文明が衰亡するとき」(初回は1985年3月12日午後8:00~9:00、全3回、教育テレビ)、「高坂正堯・世界と語る」(初回は1985年4月15日午後8:00~8:45、全3回、教育テレビ)、「90年代・日本の条件~冷戦後の国際社会を展望して」(初回は

1991年1月5日午後10:15~11:00、全4回、教育テレビ)、「ポスト冷戦の国際社会」(初回は1994年10月11日午後11:00~11:30、全12回、教育テレビ)のように、メインキャスターを務めるドキュメンタリーや連続講演が放送された。高坂は番組の「看板」となったのである。

## 2. 出演者の1人として

まず、シンポジウム、座談会、討論会の出席者の1人として出演した場合について、具体的に見ていく<sup>5)</sup>。

### (1) 「わが外交を語る 吉田茂」(1965年8月29日 午後10:00~11:00、総合テレビ)<sup>6)</sup>



政治評論家の萩原延壽と組み、2人で吉田茂元首相へのインタビューを行ったもの。収録は放送1週間前の8月22日、大磯の吉田邸で行われた。終始柔和な物腰で、くつろいだ吉田の姿が印象的である。これに先立って、高坂は1964年2月の『中央公論』に掲載され、脚光を浴びた論文「宰相吉田茂論」の執筆のためにインタビューを行っており、吉田のお気に入りであった。

日本を安定させるために一番必要なものは何か問うた高坂に、吉田は外国のマーケットを開拓することであると答えている。また、軍備の問題については、もういい加減に力を入れなければいけないと応じ、「軍備ということは国の権力の象徴と相俟つものであって、軍備がやはり弱ければ国力の発展ということは難しいですね」と持論を述べた。いかにも、大日本帝国の全盛期に、軍閥の割拠する中国大陆で帝国の権益を守るべく外交官として働いた、吉田らしい答えであった。それはまた、軽武装を永遠の原則とする後年の「吉田ドクトリン」論が、吉

田本人の考えとはかけ離れたものであることの、端的な証左でもあろう。

(2) 「ドキュメント “激動”への選択 `76総選挙」(1976年12月8日午後10:15-11:00、総合テレビ)



1976年12月5日の衆議院議員総選挙の結果を受けた報道番組。動画などを用いて、見せ方を重視した演出を行っている。与党・自民党の敗北の責任を問われる形で三木武夫首相は退陣。逆に、共産党を除く当時の野党（社会党、公明党、民社党、新自由クラブ）は軒並み議席を伸ばした。コメントを求められた高坂は、この結果を「多中心主義の始まり」と表現し、自民党単独政権はほとんど終わったが、二大政党にはならず、「真ん中が増えた」と指摘。問題は自民党長期政権指導層の老齢化や怠惰だと断じた。当時の報道番組としては派手とも言える画面が一転し、高坂が登場するのは背景のないスタジオ。専門家の語りに視聴者を集中させる演出と言える。

(3) 「歴史への招待」(総合テレビ)

司会・鈴木健二の人気番組。大がかりなセットや大きなパネルでの解説といった演出と鈴木の名調子で、高い視聴率を記録した<sup>7)</sup>。高坂の出演は「代議士誕生譚」(1979年4月26日午後10:00-10:29)、「関ヶ原合戦(3) 一減封没収632万石」(1980年10月16日午後10:00-10:29)、「日米暗号戦争(2) 一機密暗号“パープル”」(1982年9月29日午後10:00-10:29)の3回。解説やVTRの合間に、鈴木との歴史談議が入る形である。

鈴木の話術でスムーズに引き出される高坂のコメントは、上手い。「敵というものはないものなんですよ。勝てばそれまでの対立構造が変わり、別のところに

敵が出来るわけですからね」とか(高坂ほか, 1981: 104)、同質性が高くムードで動く日本人は、雰囲気や気分の情報を求め、論理的、客観的に得られる情報を取ることの大事さが分からないとかいった指摘は(高坂ほか, 1983: 168)、視聴者も肯かされたであろう。2人の談義には何も付け加えられず、語りに集中させている。

(4) 「にっぽんの英雄」(1981年1月1日午後10:45-11:50、総合テレビ)

同じく鈴木健二が司会を務めた正月特番。「歴史への招待」の特別番外編とも言える。ほかの出演者は、作家の南條範夫と堺屋太一。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3人をどう評価するかという、歴史好きの遊びのような問いに対して、高坂は、豊かに派手になって失敗した秀吉はあまり高くは評価しないと述べ、逆に、「一番天才らしい」信長を絶賛。無茶苦茶さと醒めた合理性の両方を持っていることと、運の良さを指摘する(「英雄の条件というのは、際どいものだと思うんです。織田信長なんか、運さえ悪ければうんと前に駄目ですよ」)。祖先の主君筋の武田信玄について、「運が良ければ天下を取れていた」と擁護するのは御愛嬌であるが、好き嫌いをはっきり出ししながら、知的な遊戯を楽しむ姿勢がよく見える。

なお、番組に先立ってNHKが調査した「にっぽんの英雄」は誰かとのアンケート結果によると、1位が野口英世、2位が王貞治で、以下、3位福沢諭吉、4位豊臣秀吉、5位西郷隆盛、6位吉田茂、7位聖徳太子、8位徳川家康、9位松下幸之助、10位水戸黄門であった。これも遊びのような調査ではあるが、時代を感じさせる。

(5) 「NHK 特集 日米衛星討論 防衛摩擦」1981年12月21日午後7:30-8:49、総合テレビ)

アメリカ側の討論者にキャスパー・ワインバーガー国防長官を迎え、高坂のほか、同じく国際政治学者の神谷不二、NHKからはワシントンの政治をよく知る日高義樹と高島肇久を配した。放送自体は録画を用いているが、衛星を使ってリアルタイムで討論を繰り広げた新しさを強調し、特別な緊張感を演出している。映像は、NHK放送センターでの準備風景から入り、日米それぞれのスタジオへと移って、ヘッドセットをつけた出演者を映し出していく。臨場感を持った冒頭のナレーションが雰囲気

をよく伝えているので、長くなるが引用しておきたい。

「夜の東京、放送センター。511 スタジオ。東京からワシントンへの映像は既に繋がり、ワシントンからの映像を待っている。討論を行う日本側の出演者は、慶應大学の神谷不二教授と、京都大学の高坂正堯教授。共に国際政治が専門である。討論には NHK の日高特派員も現地で加わる。日米間の防衛摩擦の問題を中心に、アメリカの世界戦略、核兵器と軍縮の問題まで、幅広い議論が行われる予定である。ハーバード大学時代、弁論部長として雄弁を馳せたワインバーガー氏は、発足後、間もなく 1 年を迎えるレーガン政権の中で、軍事力強化の推進者として揺るぎない地位を固めている。日本時間 16 日、午後 9 時 33 分。東京とワシントンの回線が、完全に繋がった」



討論の言語は英語であるが、放送では日本語の字幕が出たり、吹き替えになったりと、扱いが一定しない。相手は、ロナルド・レーガン政権の強硬な対外政策を指揮したことで知られる、ワインバーガーである。高坂は、

ソ連の軍事力や脅威を過大評価しすぎではないかと批判を加え、ワインバーガーは、アメリカが求めるのは対ソ優位ではなく抑止力であると反論。逆に、高坂が日本の経済協力など「広い意味の防衛政策」を主張し、通常の意味での軍事費を抑えようとするのに対しては、十分な軍事力を備えることも非常に重要であり、日本が公平に防衛分担をしているという印象をアメリカ世論に与える必要があると異議を唱えている。



高坂が、当時の日本側の 1 つの立場を代弁する役割を担ったことは、疑いない。彼自身が深くかかわった日本の総合安全保障政策をめぐる論点が正しく浮かびあがっている点で、質にも優れた番組であったと言える。そのうえで、討論の舞台裏まで番組の一部として映し出した点で、演出の面でも面白い。

#### (6) 「挑戦するサッチャー 討論、日英そして世界」

1982 年 9 月 21 日午後 10:00-10:45、総合テレビ

イギリスの首相であったマーガレット・サッチャーを迎え、高坂と、財界から第一勧業銀行頭取を退任して間もない村本周三、NHK からは司会で磯村尚徳。迎賓館からの録画中継。討論の言語は英語で、日本語字幕がついている。高坂は英米の対ソ政策のズレを健全なものと評価したが、サッチャリズムについては真っ向から批判し、サッチャーとの応酬に入ったところで、時間切れとなった。

#### (7) 「構成討論 テレビジョンに何ができるか(1) テレビとデモクラシー〜テレビ放送開始 30 周年記念番組〜」1983 年 2 月 5 日午後 8:00-9:30、教育テレビ

夜の『ニュースセンター 9 時』のキャスターを務め、後



に解説委員長となる小浜維人を司会に、別々に収録した 3 組の「構成討論」（高坂の相手は経済学者の伊東光晴）を適宜挟み込んだ、「テレビ放送開始 30 周年記念番組」。高坂は、テレビにより初めて、日本が同時的なメディアでカバーされ、日本人が同じものを見るようになり、オリンピックのような祭典の効果を大きくしたと感想を述べたり、柳家金語楼（落語家で、テレビでも活躍）の「只の客ほど怖いものはない」との言を紹介したりしている。

なお、最後にテレビへの期待を問われた高坂は、「何よりもドキュメンタリーですね。テレビというのは映像を通じて事実を伝えるというのが一番強いところなんですから」と答えている。そのゆきがかかりがあつてか、後述のドキュメンタリーシリーズで、メインキャスターを務めさせられる羽目になったのかも知れない<sup>8)</sup>。

### 3. メインキャストとして

次に、講演、対談、ドキュメンタリーへの出演のように、高坂がメインキャストであり、彼なしには成り立たなかったような番組を、いくつか具体的に見てみたい。

#### (1) 「高坂正堯の宰相・吉田茂論」（1978 年 9 月 21 日 午後 10:00-10:29、総合テレビ）



「わが外交を語る 吉田茂」から 13 年後、吉田の死去からは 11 年後に、高坂が改めて吉田邸を訪れ、証言 VTR や再現ドラマを挟みながら回顧していく、一風変わったドキュメンタリー。吉田茂が築いた経済中心主義の日本の外交が大きく揺さぶられているときに、彼の政治信条や行動についてもう 1 度考える——というのが目的であるが、高坂の吉田評は一貫している。吉田が存命ならば

「金を、影響力や信用に変える方法を考えなくちゃいけないね。もっとも、大概の金持ちはそれに失敗しますがね」と言うかも知れない、彼の孫の時代になり、吉田の外交を創造的に継承する必要がある、と課題を投げかけて番組は終わる。番組中、吉田との思い出を振り返る高坂が、視聴者と一緒に VTR を見るという演出が繰り返されるが、吉田に対する批評者でありながら同時に証言者——ことによると代弁者——でもあるという微妙な立ち位置が、巧みに表現されているように思われる。

#### (2) 「教育テレビスペシャル 新・文明が衰亡するとき」（全 3 回、1985 年 3 月 12 日午後 8:00-9:00、3 月 13 日午後 8:00-8:50、3 月 14 日午後 8:00-8:50、教育テレビ）

3 夜連続企画。先の「テレビジョンに何ができるか」で、「BBC を超して欲しい」と語った高坂の言を反映してか、それらしいドキュメンタリーに上手く仕上がっている。もちろん、高坂の『文明が衰亡するとき』（新潮社、1981 年）がベストセラーとなったのを受けてのものでもあったことは、想像に難くない。



「こうして東京を空から眺めてみますと、東京の大きさと活力を改めて感じさせられます。それとともに、今から 100 年後の日本人が、昭和 30 年代から今日までの時代を神話の物語として回想するかも知れないという思いに駆られるのです。何しろ、戦争に敗れ、資源の少ない小さな国日本が、わずか 20 年余りの間に金持ちの国アメリカに追いつくほどの経済発展を成し遂げたからです。」

問題関心自体は高坂ならではの持続的なものであるが、

番組冒頭から、高所恐怖症にもかかわらずヘリで東京を眺めるその姿からは、いかにも無理をさせられている様子が窺える。ヴェネツィアの運河で作家の塩野七生とゴンドラに乗り、ロンドンではヴィクトリア朝の矛盾を解説し、フォロ・ロマーノの遺跡を歩き、アメリカの行方を展望する。内容はかなり硬派であるが、説明は分かりやすく、古代ローマ帝国と現代アメリカの対比などは、ローマのパンテオンとアメリカの議事堂の両方を高坂が訪れて語るだけに、テレビで見栄えもする。『文明が衰亡するとき』と主要なテーマを共有しながらも、高坂得意のイギリスの事例のみならず、多くの素材を補強し、新たなドキュメンタリーとして成立している。



番組全体の締めくくり、高坂はニューヨークのビル群を見下ろしながら、ローマの名将スキピオが運命の無情さを予言した言葉、「いつかローマも同じ運命を辿るだろう」を引用する。背後の手すりを掴んで離さない奇妙な立ち姿は、やはり高所恐怖症のためである。東京上空から始まり、最後は高層ビルの屋上へ。高坂は楽しみながらも一生懸命に、自分に求められた役割を全うしたのであった。



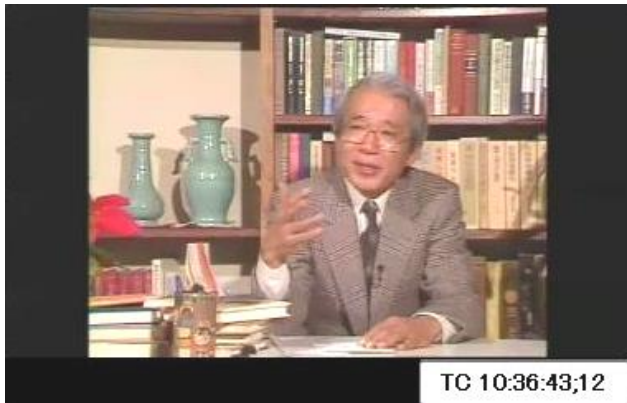
(3) 「ETV8 高坂正堯・世界と語る」(全3回、1985年  
4月15日午後 8:00-8:45、4月16日午後 8:00-8:45、  
4月17日午後 8:00-8:45、教育テレビ)

「新・文明が衰亡するとき」に引き続き、3夜連続で、今度は英米の知識人と対談する。彼らは「新・～」でも若干登場しており、製作費の都合もあって素材を共有しながら、別の番組を作ったということだろう。「アメリカは病んでいるか」ではデイビッド・ハルバースタム、「イギリスの没落とパブリックスクール」ではアンソニー・ Sampson、「アメリカ文明とは何か」ではダニエル・ブーアスティンと、名だたるジャーナリスト、歴史家と語り合っている。議論の内容もさることながら、収録前後の打ち解けた姿もあえて放送することで、高坂が世界の一流の知性と親交を結び、対等に語り合える人物であることを印象づけ、彼を「看板」とした番組にまとめたと言える。



(4) 「NHK ウィークエンドセミナー 90年代 日本の条件 冷戦後の国際社会を展望して」(全 4 回、1991年 1月 5 日午後 10:15-11:00、1月 12 日午後 10:15-11:00、1月 19 日午後 10:20-11:05、1月 26 日午後 10:15-11:00、教育テレビ)

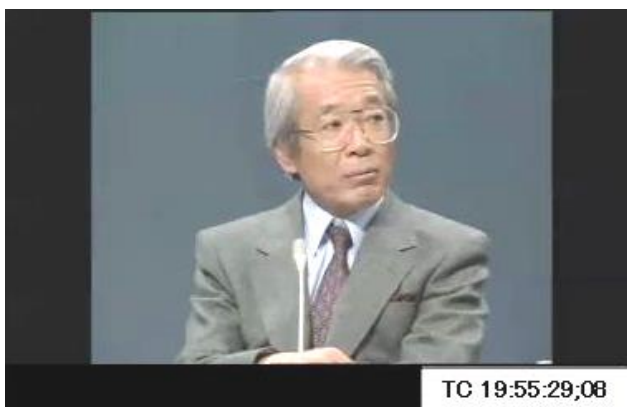
4週連続シリーズ。1990年4月から1年間、金曜日の夜と土曜日の夜にそれぞれ、学者や作家たちが交代で講義を行った。これも内容もさることながら、高坂の自宅の応接間が、少し手を加えてそのまま収録現場になっているというのが興味深い。打ち合わせに訪れたスタッフの思いつきであろうか。ある意味では、高坂のタレント性がテレビで注目された反映であったかも知れない。



#### 4. 「新しいテレビ政治」の時代に

1980年代半ば以降、テレビ朝日の『ニュースステーション』、『朝まで生テレビ』、『サンデープロジェクト』といった番組の成功と表裏で、自民党長期政権の衰退と崩壊、冷戦の終焉と湾岸戦争など大事件が続き、テレビと政治の関係は変容していく。そのような時代に高坂は、本来の専門性に立ち返ったような番組に多く出演することになった。

- (1) 「NHKスペシャル 徹底討論 湾岸戦争 日本は何をなすべきか」全2部、1991年2月23日午後7:20-9:00、9:15-10:29、総合テレビ)



折からの湾岸戦争に対する日本の姿勢をめぐり、激論が交わされた討論会。翌24日にはアメリカを中心とした多国籍軍が地上戦に突入、5日間ほどで戦闘は終結する。そのようなタイミングでの生放送となった。

「アメリカの方針というのは支持します。ほかに方法がない」と断じた高坂は、いつもの柔らかな京都弁とは打って変わり、厳しい表情で、舌鋒鋭く持説を展開している。この期に及んで日本はアメリカ一辺倒を止め、和平のためイラクに働きかけるべきだという論者に対しては、「できませんこと」と一刀両断。そのほか、相手の話を遮ったり、声を荒げて論駁したりして、いわゆる平和主義的な議論を徹底的に批判した。注目すべきは、番組中、高坂が日本による「金だけ」の援助の限界を指摘し、日本国憲法の戦争放棄条項があるため、国連に対する協力ができないという解釈に、正面から異論を唱えていることである。それは高坂が、重要な部分で解釈が分かれる現行憲法をそのままにする危険性を改めて痛感し、改憲を良しとするに至る、その過程の1つであった<sup>9)</sup>。

- (2) 「NHKスペシャル 連続討論 政治改革 第1回 自民党はどう変わるか」1991年6月26日午後7:30-8:44、総合テレビ)



緊迫感のある音楽、討論のラウンドテーブルを背景に司会の小浜維人が口上を述べる場面から、番組は始まる。リアルタイムの臨場感を伝える演出であろうが、『朝まで生テレビ』などと同様の手法である。政治改革というテーマが説明された後、街頭インタビューでは政治不信が語られ、選挙制度改革の挫折や政治家の汚職事件の流れが簡潔に説明されたうえで、討論に突入する。

この番組では、高坂はいつもの口調には戻っているも



の、口先だけで実行をとまなわない政治家に対する不信心は、柔らかでありながら辛辣な言葉となって噴き出している。若手の国会議員たちに対しては、理屈は良いが、同じ組織に属する先輩に頭があがらないという悪癖を克服できるか、「それに自信がとおりになるんだったら、おやりください」。番組の最後、当時の小渕恵三自民党幹事長が「俗に言う金属疲労した制度を活性化して…」とまとめに入ると、すかさず、「お聞きしますとね、現職優先とか言うておられますね。現職優先で、金属疲労で治るんでしょうか」と矛盾を批判するのであった。

司会を務めた小浜は京都大学出身で、高坂とは歳も近かった。画面に映る相手の表情や態度から、特に政治家の「ほんね」を視聴者に伝えることがテレビの課題であると考えていた小浜にとって（小浜 1989）、高坂のような人物の出演は、歓迎すべきものであっただろう。

### (3) 「憲法記念日特集 日本の進路を問う～国際貢献と憲法～」1993年5月3日午前 9:00-10:14、総合テレビ



出席者は高坂のほか、評論家の加藤周一、国際政治学者の坂本義和と、初代内閣安全保障室長などを歴任した佐々淳行。司会はこれも小浜維人。公開の席での坂本との討論は、高坂が『中央公論』の 1963 年 1 月号に掲載された「現実主義者の平和論」で華々しく論壇デビューし、坂本と加藤を名指しで批判して以来、実現できていない組み合わせであった。両者とも、おそらくそのことを意識している。加藤が国際的視野からの理想論を述べ、佐々が実際的な法律論で応じたのに対して、高坂と坂本は慎重に言葉を選び、歴史認識や国際政治観といった議論の根本をぶつけ合ったのである。憲法を見据えた討論

は、その改正の是非にも及んだ。

高坂「私は改正して、国際貢献すべきだと思います。ただその改正の形式は、全部憲法を変えるのではなくて、アメリカみたいに修正 1 条とか 2 条とか、それを足していくのが一番良いのではないかという感じがするんです。ただまあもう 1 つ言わしてもうたら、私は前文というのはだいたい憲法にはなくても良いものだと思います。…」

小浜「坂本さん。高坂さんは前文はいらないと。9 条も含めて憲法を改正して、国際的な役割を果たせと仰いましたが、坂本さんはどうお考えですか」

坂本「全く反対です。……改憲が目的ではなくて、国際貢献が目的であるならば、現行の憲法の下でやらなければならないことはまだたくさんあるんです」

結局、議論は平行線のままに終わったが、高坂と坂本の「論争」が深い認識の違い、思想の違いに根ざしたものであることを浮き彫りにした点で、日本の国際政治学の歴史において大きな意義のあるやりとりであった。

### (4) 「NHK 人間大学 ポスト冷戦の国際社会」(全 12 回、教育テレビ)

1994 年の 10 月 11 日午後 11:00~11:30 に始まって 12 月 20 日まで、全 12 回放送された連続講義。「NHK 人間大学」のテキストのほか、『平和と危機の構造——ポスト冷戦の国際政治』（日本放送出版協会、1995 年）にもまとめられ、出版された。高坂の生前最後の単著として広く知られているので、内容には立ち入らない。眼前の国際政治の激動に対して、一歩退いて考える歴史的、学問的な視座を提供したという意義を指摘するに留めたい。

### (5) 「ETV 特集 外相・重光葵～高坂正堯が語る日本の外交～」(1995 年 8 月 31 日午後 8:00-8:45、教育テレビ)

戦前戦後に活躍した外交官、政治家であった重光葵を題材に、「戦争と日本」について考えるという教養番組。



重光の生家・無迹庵を高坂が訪れるオープニング映像から始まって、カメラがスタジオに移ると、闇のなかに重光の肖像などの大きなパネルが並べられている。そこに、初めはシルエットで現れた高坂が、闇のなかから浮かびあがって登場するという演出である。



高坂は、重光が当時の良き日本人を代表しているとしながらも、組織のなかで生きなければいけなかった限界を指摘。アジアを植民地から解放し、自主独立の国として交流するという大東亜宣言の理念そのものは正しいが、アジア主義の問題は普遍的な原理がないことであり、西欧との対抗で世界を生存競争の場と見すぎる危険を持つ

と批判している。そのように人種や文明で東洋と西洋に分けるのではなく、日本は島国であり、東洋と西洋の狭間という難しい立場に立つことを宿命づけられていると考えなければならない、と。それは、初めての著書『海洋国家日本の構想』（中央公論社、1965 年）以来の、高坂の所説でもあった。

こうして、この番組では終始、重光という歴史上の人物よりも、重光について論じる高坂の方に焦点が当てられている。副題の通り、「高坂正堯が語る」のを楽しみに見るための番組だったと言える。

### むすびにかえて

高坂正堯は、30 年以上の長きにわたる NHK とのかかわりのなかで、さまざまな番組に出演している。そのなかには、政治学、国際政治学という彼の専門性からは外れた番組もあり、むしろ彼のタレント性に注目したものも少なくなかった。しかし高坂は、晩年、「新しいテレビ政治」の時代を迎えた 1990 年代には、本来の専門性に立ち返ったような番組に多く出演している。同時代の国際政治について一步退いて考える視座を提供するとともに、具体的な政治外交の課題について、時には舌鋒鋭く批判し、所論を展開したその姿は、彼一流の囚われのない、自由なものであったと言える。

ジャーナリストで、ジャーナリズムの研究者でもある武田徹は、「変革を遂げつつあったマスメディアが高坂の才能を必要とし、変化しつつあるメディアの中で高坂がその才能を存分に発揮したという双方向的な力学が働いていたのではないかと、俯瞰的な仮説を提示している（武田 2016: 161）。本稿で見てきた限り、この指摘は正しい。もっとも、高坂本人は語っていないためはっきりしないが、そこには、知識人とテレビとの関係や距離感について、模索や試行錯誤もあったのではないだろうか。他の事例と比較するなどしていけば、さらに見えてくることもあろう。それは今後の課題である。

※執筆前に、高坂門下の関静雄先生（帝塚山大学名誉教授、日本政治外交史）から多くの教示をいただいた。記して謝意を表す。本稿は「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」の成果の一部であり、引用した番組の静止画は論文で用いるために提供を受けたものである。

## 【補註】

- 1 顕著な例外として、本稿の唯一直接の先行研究といえる武田 2016 がある。
- 2 逢坂 2014 の評価。
- 3 「番組表ヒストリー」<https://www.NHK.or.jp/archives/chronicle/>（2020 年 5 月 18 日確認）。
- 4 「NHK アーカイブス学術利用トライアル」<https://www.NHK.or.jp/archives/academic/>（2020 年 5 月 18 日確認）。
- 5 番組の閲覧と静止画の引用にあたっては、2019 年度第 4 回「NHK アーカイブス学術利用トライアル」で許可を得た。
- 6 写真は NHK アーカイブスの映像から作成された静止画。右下の数字はタイムコード（TC）を表す。以下、同じ。
- 7 「歴史番組に歴史あり！」<https://www2.NHK.or.jp/archives/search/special/detail/?d=culture012>（2020 年 5 月 18 日確認）。
- 8 いずれも制作者は和田光弘。和田は『NHK 特集』を手がけるなど数多のドキュメンタリー番組にかかわり、方法論と作り手の視点の重要性に自覚的であった（和田 1987）。
- 9 高坂の憲法論については、さしあたり森田 2016 を参照。
- 10 番組の閲覧と静止画の引用にあたっては、2019 年度第 4 回「NHK アーカイブス学術利用トライアル」で許可を得た。

## 【引用・参考文献】

- 逢坂巖 (2014)『日本政治とメディア——テレビの登場からネット時代まで』（中央公論新社）
- 小浜維人 (1989)「テレビジャーナリズムと政治家」『新聞研究』第 455 号、pp.18-20
- 高坂正堯 (1965)『海洋国家日本の構想』（中央公論社）
- 高坂正堯 (1968)『宰相吉田茂』（中央公論社）
- 高坂正堯 (1981)『文明が衰亡するとき』（新潮社）
- 高坂正堯 (1995)『平和と危機の構造——ポスト冷戦の国際政治』（日本放送出版協会）
- 高坂正堯ほか (1980、1981、1983)『歴史への招待』第 8 巻、第 18 巻、第 27 巻（いずれも日本放送協会）
- 武田徹 (2016)「二つのメディア変革期と高坂正堯」五百旗頭真、中西寛編『高坂正堯と戦後日本』（中央公論新社）、pp.161-187
- 星浩、逢坂巖 (2006)『テレビ政治——国会報道から TV タックルまで』（朝日新聞社）
- 森田吉彦 (2016)「高坂正堯の憲法観——積極的な改憲論への転回はいかになされたのか」『Voice』第 463 号、pp.158-167
- 和田光弘 (1987)「制作者の“眼と志”結実へ、手法開発も」『月刊民放』第 17 巻第 9 号、pp.16-18